

100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 08 / (株)木崎屋

命と暮らしを支える米屋がルーツ 大宮の発展と共に、170年の時を重ねて



いしだ かずひろ
石田 和廣
(株)木崎屋 取締役社長

1949年、さいたま市（旧大宮市）生まれ。日本大学商学部を卒業後、東京都中央食料協同組合に入社。1974年、(有)木崎屋入社。2003年、代表取締役社長就任。先代・啓藏氏の時代より大宮商工会議所・さいたま商工会議所の要職を歴任。

いしだ ゆうぞう
石田 優藏
(株)木崎屋 取締役

1979年、さいたま市（旧大宮市）生まれ。祖父から「藏」の1文字をとって名付けられ、日本大学大学院で財政学を学び、2004年に(株)木崎屋入社、2007年に取締役に就任。

大宮駅から徒歩10分。近年次々とマンションビル建設が進む旧中山道に面して、洗練されたオフィスビルが建つ。その1階にひるがえるのは「木崎屋」と染め抜かれた藍のれん。大宮きつての老舗米屋として、戦火を超えて事業をつないできた同社の歴史を、石田和廣取締役社長に伺った。

中山道沿いの米屋として 激動の時代に家業をつないで

「木崎屋」という社名は、浦和にある木崎という地名に由来します。江戸末期の1852年、初代が大宮に移り住み、故郷の地名を屋号としたのですが、この初代が何をしていた人物か、確たる記録は残っていません。ただ、当社では浅草・玉姫稲荷のご分祀をいただき、代々お祀りしていることから、江戸に行商に出る飾り職人だったのでは…と推測しています。

現在のような米屋になったのは1887年、祖父である2代目から。木崎は見沼田んぼに近い地区なので、農業をやっている親戚がいたのでしょう。

しかしその後、日本は戦争に突入します。若い方はご存知ないかもしれませんが、戦時中は米・麦・味噌などの主食の販売・供給を、政府が管理していました。国民は配給手帳を持って、家族分の米穀をもらいに行くのです。2代目・3代目はそういう時代に、埼玉食料営団、食料品配給公団、大宮共和米穀企業組合といった配給組織の一員として、市民の暮らしを支えてきたのです。

戦後、急発展する大宮で 躍進した3代目・父の時代

戦後処理が終わり「木崎屋」の名を取り戻したのは1956年。ようやく(有)木崎屋として、米屋を再開できるようになった3代目の父に、転機が訪れたのは1983年のことでした。なんと



旧中山道に面する、かつての店舗を描いた油絵と1970年頃の写真。

近隣からのもらい火で、店舗が全焼してしまったのです。

父はこれをきっかけに社屋をビルに建て替え、1階は米屋、上階は賃貸物件にすることを決意します。一介の米屋としては大きな負債を抱えることとなりますが、折しも1982年には、大宮駅始発で東北・上越新幹線が開業することになっていました。

乗降客も人口も伸びるといふ父の予測は、見事に当たります。当時、大宮駅の駅弁や立ち食いそばなどの原料を一手に引き受けていたこともあり、米穀の売上は絶好調。賃貸フロアも竣工と同時に満室となりました。

不動産業とこだわりの米屋 2本柱で、次の世代へ

しかしながら商売には波があります。2003年に私が父から事業を引き継いだ頃、大宮では大規模開発が相次ぎ、駅からやや遠い当ビルは、一時全フロア空室の危機に陥りました。

そこで私も一大決心をし、現在でいうOAフロアへの全面改修に着手しました。オフィスで急速に進むパソコンやOA機器に対応できなければ、賃貸ビルとしての価値を失うと感じたからです。もちろんこの時もかなりの借金を背負うことになりましたが、判断が早かったことが幸いし、また満室にすることができました。

木崎屋の現在の事業としては不動産賃貸業が中心で、米屋の方はごく小規模です。しかし、だからこそ長年付き合いのある産地から、選りすぐりのおいしい米を扱おう。そんなこだわりを持って続けています。

商いは時代によって変わるものですから、5代目でも米屋を続けてくれるかは分かりませんが、この地で代々続く「木崎屋」の名に誇りをもって、新たなチャレンジをしてくれたらと願っています。



1983年、もらい火で店舗を焼失して建て替えられた木崎屋ビル。2004年、OAフロアに対応する大改修で、現在の姿に。